

平日の

The 1st Weekday Afternoon Concert

第1回

午後のコンサート。

音楽対話
ブラームス&ドヴォルザーク

指揮とお話◎尾高 忠明

Tadaaki Otaka, *conduct & talk*

コンサートマスター◎依田 真宣

Masanobu Yoda, *concertmaster*

ブラームス:ハンガリー舞曲第1番 ト短調

Johannes Brahms: Hungarian Dance No.1 in G minor

ドヴォルザーク:スラヴ舞曲第10番 作品72-2

Antonín Dvořák: Slavonic Dances No. 10 op.72-2

ブラームス:ハンガリー舞曲第5番 嬰へ短調

Johannes Brahms: Hungarian Dance No.5 in F-sharp minor

— 休憩 Intermission (約15分) —

ドヴォルザーク:交響曲第9番 ホ短調 作品95『新世界より』

Antonín Dvořák: Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"

- I. アダージョ — アレグロ・モルト Adagio - Allegro molto
- II. ラルゴ Largo
- III. スケルツォ:モルト・ヴィヴァーチェ Scherzo: Molto vivace
- IV. アレグロ・コン・フォーコ Allegro con fuoco



7/4

7/4(月) 14:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

Mon. July 4, 2016, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall



主催:公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団 / 助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra / Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan

FM プラボー! オーケストラ(NHK-FM放送)にて後日放送予定

本日のマエストロ



指揮とお話: 尾高 忠明
Tadaaki Otaka, conduct & talk

©Martin Richardson

1947年生まれ。国内主要オーケストラへの定期的な客演に加え、ロンドン響、ベルリン放送響など世界各地のオーケストラへ客演。これまで1991年度第23回サントリー音楽賞受賞。1993年ウェールズ音楽演劇大学より名誉会員の称号を、ウェールズ大学より名誉博士号を、1997年英国エリザベス女王より大英勲章CBEを授与された。さらに1999年には英国エルガー協会より、日本人初のエルガー・メダルを授与されている。2012年有馬賞(NHK交響楽団)、2014年北海道文化賞受賞。現在NHK交響楽団正指揮者、札幌交響楽団名誉音楽監督、BBCウェールズ・ナショナル管弦楽団(旧BBCウェールズ交響楽団)桂冠指揮者等を務めている。東京藝術大学名誉教授、相愛音楽大学、京都市立芸術大学音楽学部客員教授、国立音楽大学招聘教授を務めている。

本日のポイント

解説◎柴田 克彦

- 🎵 ドイツの巨匠ブラームスとチェコの大家ドヴォルザークの明快な名曲。
- 🎵 本日前半のプログラムは、“ハンガリーの民俗的舞曲のリメイク版”と“スラヴ民族の舞曲のスタイルによるオリジナル曲”。
- 🎵 後半のプログラムは、チェコの大家が“新世界”アメリカで書いた、史上屈指の人気交響曲。
- 🎵 全体のカギは、民俗的な音楽と西欧クラシック音楽の巧みな融合。
- 🎵 最大の魅力は、哀愁が漂う旋律美。



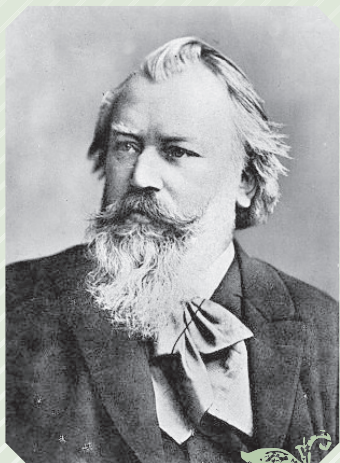
7/4

1 プラス・ワン!

ブラームスとドヴォルザークの素敵な関係

ドヴォルザークの成功の端緒は、オーストリア国家奨学金の獲得でした。その審査員として才能を見出したのが8歳年上のブラームスです。さらに彼は、ベルリンの出版者ジムロックにドヴォルザークを紹介。これが作品認知の大きな要因となりました。そしてジムロックが、『ハンガリー舞曲集』に続くヒットを狙って依頼したのが『スラヴ舞曲集』。したがって両曲集は二人の関係を象徴する作品でもあります。また二人が親交を結んだことはもちろん、その後ブラームスは、アメリカ滞在中のドヴォルザークに代わって、出版作の校訂を引き受けてもいます。

本日の作曲家



ヨハネス・
ブラームス
(1833-1897)

ブラームスは、ドイツの中期～後期ロマン派の
大作曲家です。元コントラバス奏者の父のも
とハンブルクに生まれた彼は、幼少から音楽の才能
を示し、20歳のとき、生涯の盟友となったヴァイオリ
ニスト、ヨアヒムの紹介でシューマン家を訪問。そこ
で才能を認められたのが、世に出るきっかけとなり
ました。1862年ウィーンに進出。1868年の『ドイツ・
レクイエム』で名声を確立した後は、次々に傑作を
発表しました。

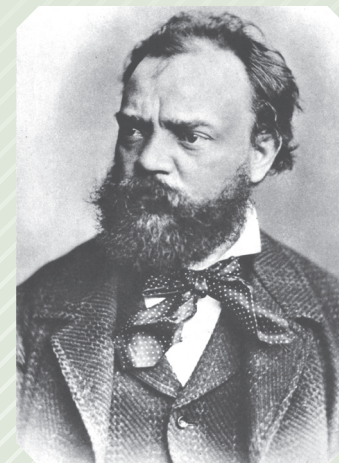
当時の作曲家たちが文学的題材や標題音楽
に走る中、彼は、バッハやベートーヴェンを範
として、交響曲や室内楽曲など“音のみで音楽を語
る”絶対音楽に固執。厳しい自己批判から多数の作
品を抹消し、交響曲第1番の完成に20数年をかけ
たりもしました。それゆえ完成作はオペラ以外の全
ジャンルにわたって名作が目白押し。その音楽は、
生地北ドイツを思わせる暗めの色調と分厚いサウン
ド、憂愁を帯びたロマン性が魅力を成しています。

性格はシャイで頑固で人情家。ワーグナー派と
の争いで音楽界を二分したブラームス派の
旗頭としても知られていますが、本人は別にワーグ
ナー嫌いではなかったといえます。また、恩人シュー
マンの妻クララとの親密な関係も重要ポイント。
シューマンが自殺(未遂)した際、親身に面倒をみつ
つ、愛情を抱きましたが、その後友情に変わったとさ
れています。二人の関係は終生=約40年続き、彼
は生涯独身のまま、クララ死去の翌年、後を追うよ
うに亡くなりました。

ドヴォルザークは、チェコの国民楽派を代表す
る作曲家です。プラハ近郊の村の宿屋・兼・
居酒屋・兼・肉屋に生まれた彼は、肉屋の修業に出
され、13歳で職人試験に合格しました(それゆえ彼
は肉屋の職人資格をもつ唯一の大作曲家です)。
しかし音楽の才能は抑え難く、オルガン学校卒業
後、オーケストラのヴィオラ奏者になりました。作
曲家としては遅咲きで、1875年にオーストリア国家
奨学金を獲得し、審査員ブラームスの後押しを得
て飛躍。『スラヴ舞曲集』で名を上げた後、イギリス
に再三招かれるなど国際的な名声を確立しました。
1892年には音楽院の院長としてアメリカへ渡り、
交響曲『新世界より』等の代表作を作曲。帰国後は
プラハ音楽院の教授および院長として後進の指導
にも努めました。

彼は、地元ボヘミアをはじめとするスラヴの民
族色を西欧の様式に同化させた独自の作
風を確立。交響曲や室内楽曲などの絶対音楽で真
価を発揮し、チェコの国民主義音楽にグローバル性
をもたらしました。そして何より無類のメロディメー
カー。その才能はブラームスも羨んだほどです。

30代半ばに子供を3人続けて亡くす不幸は
ありましたが、普通に結婚して6人の子供
を育てた彼は、大作曲家には珍しいほど真っ当な
家庭人。筋金入りの鉄道マニアとしても知られ、機
関車の車種や番号から運転手の名前まで暗記して
いました。さらには「鳩」も大好き。こうした趣味が話
題になるあたりにも、彼の穏当さが表れています。



アントニン・
ドヴォルザーク
(1841-1904)

楽 曲 解 説

ブラームス: ハンガリー舞曲 第1番、第5番

『ハンガリー舞曲集』(全21曲)は、1869年と80年に出版されて大ヒットしたピアノ連弾曲集。その後オーケストラ版をはじめ、様々な編曲でも親しまれています。これは、若い頃共演したヴァイオリニスト、レマーニ(ハンガリー出身)や、ロマの楽団などから吸収したハンガリーの民俗的な音楽を、ブラームス流にリメイクした作品集。ちなみに、レマーニから盗作として訴えられたものの、ブラームスは「編曲」と記していたので勝訴した、とのエピソードでも知られています。

今回の2曲は、いずれも曲集を代表する作品。第1番(ト短調。アレグロ・モルト)は、ブラームス自身がオーケストラ用に編曲した3曲のうちのひとつで、哀愁漂うメロディに、はずんだリズムが絡みながら進みます。第5番(嬰へ短調。アレグロ)は、流麗さと歯切れ良さを併せもった、同曲集の代名詞ともいえる1曲です。

ドヴォルザーク: スラヴ舞曲第10番 作品72-2

ドヴォルザークの出世作となったのが、1878年、36歳の年に作曲した『スラヴ舞曲集』第1集作品46(全8曲)。ブラームスの『ハンガリー舞曲集』で大当たりをとった出版者ジムロックが、同様の舞曲集を依頼したことによって生まれ、こちらも大ヒットしました。そして8年後の1886年に作曲されたのが、第2集作品72(全8曲)。今度は作曲料が10倍になったといえます。両曲集ともにチェコと周辺のスラヴ民族の舞曲のスタイルで書かれてはいるものの、音楽自体はすべてドヴォルザークの創作。この点が『ハンガリー舞曲集』との違いです。また、オリジナルはやはりピアノ連弾曲で、作曲者によってオーケストラ用に編曲されました。

第2集の第2曲(第10番。ホ短調。アレグレット・グラツィオーソ)は、ポーランド起源のマズルカとチェコのソウセツカーという舞曲に基づく、流麗で哀愁に充ちた作品。曲集のなかでも最も有名で、特にアンコールでよく演奏されています。

ドヴォルザーク: 交響曲第9番 ホ短調 作品95『新世界より』

ドヴォルザーク最後の交響曲。1892年9月、既に国際的な名声を得ていた彼は、ニューヨーク・ナショナル音楽院の創立者ジェネット・サーバー女史からの熱心な誘いに応じて(鉄道マニアの彼は、アメリカの新型機関車見たさに承諾したともいわれています)渡米し、1895年4月まで音楽院の院長を務めました。そして当地で知った黒人霊歌や先住民の音楽の要素と故郷ボヘミア色を融合させた名作 — 弦楽四重奏曲『アメリカ』、チェロ協奏曲など — を生み出しました。その第1弾が、1893年1～5月に作曲された本作。同年12月カーネギー・ホールで初演され、大成功を収めました。

この曲は、現地の伝統音楽への共感、アメリカ自体の印象、母国への郷愁などが融合した音楽であり、「新世界“より”」発信された“アメリカ便り”ともいべき交響曲です。持ち味であるチェコの民俗色にアメリカの空気感が加わったことで、多彩さとワールドワイドな普遍性を増した作品ともいえるでしょう。

曲は4つの楽章からなる、名旋律の宝庫です。

第1楽章 アダージョ・アレグロ・モルト。序奏部のホルンによる音型が重要。これは全楽章に登場します。主部は、その動機に基づいた主題と哀感が漂う主題を軸に進行。

第2楽章 ラルゴ。郷愁に充ちた緩徐楽章。イングリッシュ・ホルンが奏する主題は、後に歌詞が付けられ、「家路」の名で知られるようになりました。中間部以降の切なさを湛えた美感も特筆されます。

第3楽章 スケルツォ、モルト・ヴィヴァーチェ。先住民の踊りを描いた詩「ハイアワサ」から靈感を得たともいわれる、舞曲調の歯切れ良い音楽。

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ(激烈に)。力強く進むフィナーレ。高らかに奏される行進曲調の主題が中心を成し、クラリネットが出す優しい主題のほか、第1～3楽章の主題も登場します。管楽器の伸ばした音が弱まる終結は、大変珍しいパターンです。

しばた・かつひこ(音楽ライター)／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。コンサートのプログラム、宣伝媒体、CD、雑誌等の原稿執筆およびプログラム等の編集業務のほか、「ラ・フォル・ジュルネ」での講演や一般の講座も行うなど、クラシック音楽を中心に幅広く活動中。